

評価段階 A よくあてはまる = 4 B ややあてはまる = 3 C あまりあてはまらない = 2 D あてはまらない = 1

		重点目標	自己評価等 ※A～Dの数値は割合						分析及び改善策等 (分析○、対策◇)	学校運営協議会委員の御意見
			対象	A%	B	C	D	評価		
確かな学び	1	分かりやすい授業に向けた手立ての工夫	児童	45	41	10	4	3.3	3.1	<p>○ 昨年度 3.3、3.1、3.4 ave3.2 ○ 本年度は、主題研究を「ひなたの学びを具現化する授業づくり」を主題とし、取り組んできた。これまでとは違う方法で授業づくりをしている分、他校の実践例を取り入れたり、授業を互いに参観しあったりして手探りで進めている。 ◇ 個別最適な学びを推進するために、タブレットドリルやデジタル教科書、次年度から導入のロイロノートなどの積極的な活用を図る。</p>
			保護者	26	58	14	2	3.1		
			職員	8	92	0	0	3.1		
	2	望ましい学習習慣の定着に向けた手立ての工夫	児童	37	43	16	5	3.1	3.0	<p>○ 昨年度 2.8、2.9、3.1 ave2.9 ○ 児童の自己評価が高くなってきたが職員のC評価が2割あり、ずれが見られる。学習訓練は年度当初に行うものの、だんだんできなくなっている可能性がある。 ◇ 1年間を通して継続して指導していくとともに、褒めて伸ばすことで、児童ができるようになったと実感させる。</p>
			保護者	19	61	17	2	3.0		
			職員	8	69	23	0	2.9		
	3	家庭学習の習慣化に向けた手立ての工夫	児童	57	25	13	5	3.3	3.1	<p>○ 昨年度 3.5、3、2.9 ave3.1 ○ A・B評価の合計で見ると差はないが、児童はA評価が多く、ずれが見られる。 ◇ 各種学力調査や単元テストの傾向を保護者と共有し、学校・家庭が一体となって学力向上を進めるという機運を高める。</p>
			保護者	34	46	14	6	3.1		
			職員	15	69	15	0	3.0		
	4	読書習慣の定着に向けた手立ての工夫	児童	42	31	17	10	3.1	2.8	<p>○ 昨年度 2.9、2.6、3 ave2.8 ○ 読書については、児童・保護者・職員ともに低い評価となった。活字離れ・文章離れの進行は深刻である。 ◇ 学校での読書推進だけでなく、家庭でも読書を推進してもらうよう、読書の効果について各種通信や学校HP等で分かりやすく継続的に伝えていく。</p>
			保護者	10	28	37	25	2.2		
			職員	17	83	0	0	3.2		
	5	学校の合い言葉「かしこく」	児童	36	36	18	10	3.0	2.9	<p>○ 本年度新設 ○ 児童、保護者ともC、Dの評価が2～3割あり、やや低い評価となっている。この領域の1～3とのずれが見られる。 ◇ 折に触れて話題にし、合言葉として浸透させる必要がある。</p>
			保護者	13	51	30	6	2.7		
			職員	15	85	0	0	3.2		
	1	楽しい学校生活	児童	67	27	4	2	3.6	3.5	<p>○ 昨年度 3.1、3.1、3.1 ave 3.1 ○ 昨年度よりかなり高くなった。特に児童の評価が高い。ただし、C、Dの評価を0にしたい。また、児童・保護者と職員ではA、Bの割合に、ずれがある。 ◇ 児童一人一人が生き生きと活動できるよう授業力の向上を中心として高めていきたい。</p>
			保護者	60	34	4	2	3.5		
			職員	25	75	0	0	3.3		
	2	元気な挨拶や会釈の定着のための手立ての工夫	児童	55	34	8	3	3.4	3.2	<p>○ 昨年度 3.3、3、3.3 ave 3.2 ○ 校内での会釈は低学年から高学年までよくできている。ただし、地域での子ども達の挨拶の状況がやや低いと言える。 ◇ 「何時でも・何処でも・誰にでも」を合言葉に、委員会や登校班長会等ともリンクさせながら、児童への意識づけを図っていく。</p>
			保護者	36	43	21	0	3.2		
			職員	23	69	8	0	3.2		

豊かな心	3	温かい人間関係づくりに向けた手立ての工夫	児童	59	32	5	5	3.4	3.4	○ 昨年度 3.5、3、3.3 ave 3.3 ○ 保護者の評価が0.5アップした。いじめアンケートによる振り返りや、人権教室・人権に関する体験活動等により、相手の気持ちを思いやる姿勢は育ってきている。ただし児童のC、D評価10を0にしたい。 ◇ 今後も小さなトラブルの芽を見逃さず、学年・学級の問題にも組織的に対応していくとともに、児童の自己肯定感を高めていく。	○ 温かい人間関係も挨拶からだと思う。 ○ 「人に感謝、全てのものに感謝」しつつ、「ありがとうございます」「ごめんなさい」「いただきます、ごちそうさまでした」等々言葉で伝えられる感謝の心を育めば、人の痛みにも気づくことができ、友達間のトラブルやイジメ等は、なくなると確信している。その為にも家庭内での親子のコミュニケーションは大切だと思う。
			保護者	52	46	2	0	3.5			
			職員	33	67	0	0	3.3			
	4	規範意識や思いやりの心、基本的な生活習慣（スリッパ並べ、廊下歩行等）の定着	児童	55	37	6	2	3.5	3.1	○ 昨年度 3.4、2.9、2.9 ave 3.1 ○ 児童と保護者・職員にずれが見られる。また職員はC、Dが25（昨年度20）であり、職員間でのずれが見られる。 ◇ 職員間での到達目標を再度構築し、組織的に対応していく。また学校内外での過ごし方は家庭との連携が不可欠。同じベクトルで互いに協力して進める。	○ 各家庭生活環境も違うので校外においてまでベクトルを揃える事は、非常に難しいと思う。理想的な過ごし方はあるのだろうかが学校としてできる範囲の支援で良いと思う。
			保護者	38	54	6	2	3.3			
			職員	8	67	8	17	2.7			
	5	特別支援教育の充実	児童	/	/	/	/	/	3.1	○ 昨年度 /、2.9、3.2 ave 3.1 ○ 特別支援教育の内容や実際は、保護者にはなかなか見えづらい。 ◇ 職員向けの特別支援教育だよりには、すべての児童への指導のヒントやポイントがたくさん載っているのので、すべての保護者に配付し活用してもらいたい。	○ 以前よりも対象となる児童が増えている。実際は、支援者の視界が広くなり、すべての児童を特別支援教育の視点で見えるようになってきたからではないだろうか。ユニバーサルデザインの考え方で児童に寄り添っていけるといいなと思う。
			保護者	16	67	15	2	3.0			
			職員	31	69	0	0	3.3			
	6	無言清掃	児童	55	33	9	3	3.4	3.4	○ 本年度新設※3校合同の取組である。 ○ 児童、職員ともに同様な傾向にある。本年度途中から縦割り清掃班にし、上学年と掃除をすることによる効果もあったと言える。 ◇ 今後も高学年のリーダーシップを活用し、C、Dを目指す。	○ 無言清掃は各学校でも取り組めていて効果が出ていると思う。
			保護者	/	/	/	/	/			
			職員	46	46	8	0	3.4			
	7	学校の合い言葉「あかるく」	児童	57	34	7	2	3.5	3.2	○ 本年度新設 ○ 全体的に良い傾向であるが、児童と保護者・職員のA、Bは逆になっており、ずれがある。また、保護者の26がC、Dであり、注意が必要。 ◇ 本領域1同様、授業力を高めるとともに、特別支援教育の視点からの指導を大切にし、実践していく。	○ 分かりやすく理解させて、自分の目標像として、しっかり自覚できるようにすると良い。
			保護者	25	49	25	1	3.0			
			職員	31	62	7	0	3.2			
健康・安全	1	運動や戸外での運動遊びの奨励	児童	63	21	12	4	3.4	3.2	○ 昨年度 3.6、3.1、3.1 ave 3.3 ○ 児童のAがかなり高い。職員とは逆の傾向である。昨年度も同様の傾向であった。 ◇ 授業においては、体力向上プランをもとに計画的・継続的に運動に取り組ませるとともに、運動量の確保をしていく。	○ 運動で得られる相乗効果を児童、保護者に分かりやすく説明し、体力向上プランにゲーム感覚でできる運動を取り入れ、運動の楽しさを教える工夫をしたらどうか。
			保護者	39	42	17	2	3.2			
			職員	17	58	17	8	2.8			
	2	早寝・早起き・朝ご飯の定着に向けた手立ての工夫	児童	47	32	17	4	3.2	3.2	○ 昨年度 3.1、3.1、2.9 ave 3 ○ 児童・保護者と職員ではA、Bの割合が逆になっている。職員は「手立てをとる」観点なので違いがあるとみられる。また、児童のC、Dが21であり、改善が必要。 ◇ 保護者との連携を密にし、時には面談等も取り入れながら望ましい生活リズムの確立を促す。	○ 保護者も忙しく、食事を作る事ができず、利便性を求めコンビニ弁当にするなど、基本的な生活パターンが崩れ、家庭で全員揃って食事をしたり、会話をすることがなくなっている事も原因の1つではないか。決して子供だけの問題ではない事を認識し根気強く保護者へお願いしていくしかないと思う。 ○ 残菜を減らす気持ちを養うために栽培体験活動等を積極的に取り入れてみてはどうか。
			保護者	51	42	5	2	3.4			
			職員	8	83	8	0	3.0			
	3	給食指導や弁当の日の取組による望ましい食習慣の育成	児童	51	32	13	4	3.3	3.2	○ 昨年度 3.2、3.2、3.2 ave 3.2 ○ 児童・保護者と職員とのずれがある。職員は指導側として高いが、児童保護者はC、Dで17とあり、改善が必要。 ◇ 給食の残菜量を適宜把握し、共通理解が必要。個人差を考慮しつつ、適切な指導を工夫していく。	
			保護者	42	42	14	3	3.2			
			職員	17	83	0	0	3.2			

	4	避難訓練、交通安全教室等、安全教育の充実	児童	68	25	5	2	3.6	3.4	○ 昨年度 3.5、3.1、3.3 ave 3.3 ○ 児童、保護者、職員にそれぞれにずれがある。保護者のC、Dが0に近づくようアピールも必要か。また避難訓練や避難練習は計画的に実施したが、様々な状況に対応できるような訓練にはなっていない。 ○ 本年度は地域も参加型の練習を合同で実施できた。 ◇ 「災害はいつどこで起こるか分からない」という視点に立って、新しい訓練方法を取り入れていくなどの検討が必要である。	○ 学校で防災マニュアルとして対応に見合った訓練手順等を策定し定期的な訓練教育を行う事も一つの方法だと思う。 ○ 避難の3原則、「①:想定にとられない②:最善をつくす③:率先避難者であれ」は東日本大震災釜石の奇跡で生まれた言葉である。何かのお役に立てればと思う。
			保護者	18	66	15	1	3.0			
			職員	46	54	0	0	3.5			
	5	学校の合い言葉「たくましく」	児童	56	32	8	4	3.4	3.1	○ 本年度新設 ○ 児童と保護者・職員のA、Bにずれがある。 ◇ たくましさとは何かを明確に児童に伝え、それに向かって進む指導の工夫が必要である。	○ 分かりやすく理解させて、自分の目標像としてしっかり自覚できるようになると良い。
			保護者	22	58	19	2	3.0			
			職員	15	69	15	0	3.0			
連携等	1	将来に夢をもち、地域を大切にしたい	児童	/	/	/	/	/	2.7	○ 本年度、質問内容を少し変更 ○ 保護者も職員もC、D評価が4割ある。 ◇ キャリパスポートを活用しつつ、「キャリア教育の視点」での学習にも注力する必要がある。	○ これからの多様化する社会においてキャリア教育は、不可欠と考える。パスポートの活用も含め、保護者へしっかりと目的を伝えていただきたい。
			保護者	12	46	37	2	2.7			
			職員	15	46	31	8	2.7			
	2	学校経営や教育活動等についての情報発信	児童	/	/	/	/	/	3.1	○ 昨年度 /、2.9、3.1 ave 3 ○ 保護者の評価が高い。学校通信、学級通信、学校HP、安心メールと情報発信は定期的に行っている。 ◇ 今後も定期的に発信するとともに、発信内容を見直し、充実・改善を図る。	○ 情報発信は、重要なこと。保護者の反応にとらわれず継続していただきたい。発信内容については、見出し等を工夫し、分かりやすい文章にするなど興味をもたせる手立てをしてみようか。
			保護者	42	43	11	3	3.3			
			職員	17	67	8	8	2.9			
	3	参観日・学校行事の計画的実施と内容の充実	児童	/	/	/	/	/	3.1	○ 昨年度 /、2.9、3.1 ave 3 ○ 保護者、職員ともおおむね良い。ただし、参観や学級懇談の出席率がもう少しである。 ◇ 児童の活発な様子が見られる参観授業の工夫や、保護者同士や保護者と担任がしっかり向き合って話せるような学級懇談会づくりをしていく。	○ 保護者の関心度の問題ではないか。PTAと相談し現状をPTAからの情報発信として全家庭で考えてもらう事を検討してはどうか。 ○ 保護者参加型の授業参観などの工夫をしてみたいか。
			保護者	33	53	14	1	3.2			
			職員	17	75	8	0	3.1			
	4	地域の方からの学び	児童	56	32	8	5	3.4		○ 本年度新設 ○ 評価が高い。主に見学や出前授業で有意義な体験をしているものと考えられる。今後も継続していく。	○ 今後のキーワードは「地域とのつながり」だと思う。学校⇒地区⇒地域コーディネーター⇒育成、及びPTAと更なる連携強化が必要と思う。
	5	「自分もみんなも楽しく」をめざした手立てや働きかけ	児童	75	18	5	2	3.7	3.3	○ 本年度新設 ○ 全体的に高い評価だが、児童と保護者・職員の傾向にずれがある。指導者側との視点の違いであると考えられる。 ◇ C、D評価が0になるよう、本当の「楽しさ」を考えさせ、経験させられるような手立てを模索していく。	○ 笑顔が絶えない明るいクラス作りに努めていただきたい。特に、会話(コミュニケーション)は欠かせない。誰とでも接し、思いやりの心を育てれば必然的に楽しい学校生活が送れると思う。
			保護者	23	58	15	4	3.0			
			職員	31	69	0	0	3.3			
小中一貫教育	1	小中一貫の取組の理解	児童	/	/	/	/	/	3.2	○ 本年度新設 ○ 知育、徳育、体育の財中校区での共通実践の取組である。 ○ 高い評価であるが、C、D0を目指すためにも、取組のアピールや改善が必要。	○ メディアコントロールの重要性の理解が難しいようである。
			保護者	40	44	12	4	3.2			
			職員	23	69	8	0	3.2			
	2	「自主自立の財っ子」	児童	/	/	/	/	/	2.8	○ 本年度新設 ○ この言葉自体が浸透していない。 ◇ 通信やHP等で時間をかけてアピールが必要。また児童の指導に際しても、自主自立を促すアプローチの工夫をしていく。	○ 地域やこれからの世代に周知することが大事。
			保護者	11	53	32	4	2.7			
			職員	0	92	8	0	2.9			